

論文題目

新任期にある学士課程卒業者の 看護実践経験をもとにした学びとその発展に関する研究

A study on Learning Status and Development of Newly Employed Baccalaureate
Nursing Graduates Based on Their Clinical Nursing Experience

学籍番号 1210001 橋本 麻由里
Mayuri Hashimoto

第1章. 序論

1. 課題の背景

看護実践経験をもとに学ぶことは、「看護系大学におけるモデルコアカリキュラム導入に関する調査研究報告書（2012年3月）」（文部科学省，2012）において、専門職者として研鑽し続ける基本能力として、看護専門職のコアとなる能力の一つにあげられている。

しかし、近年の多忙を極める医療現場は、新任期の看護職者（以下、新任者とする）にとって、実践経験を通して看護を学ぶには、困難を感じることも多いと推測する。実際に、“1年目はほとんど看護ができなかった”という新任者の声を聞き、新任者が実践経験をもとに学び成長するために、どのような支援をしていくとよいのかという課題意識の発端となった。

一方、学士課程卒の新任者（以下、大卒新任者とする）の看護実践能力の到達度について、実践の中で研鑽する能力は伸び悩む傾向にあり、日常の実践での能力育成や自己評価の難しさが指摘されている（中山ら，2010）。これは必ずしも新任者だけの問題ではなく、中堅看護師についても、学習ニーズが効果的な学習につながっていないことが指摘されている（永野，2002；土佐，2002）。日々の看護実践において、より良い看護を目指して考え行動することは、看護専門職として学ぶ重要な機会であろう。しかし、よりよい実践のための試行錯誤は、看護として認識されても、学びや学習として捉えられることは少なく、またその学びの過程が見えにくいことにより、意図的な学びになりにくいのではないかと考える。このことから、大卒新任者が看護実践経験をもとに、どのように学ぶのかを明らかにすることは大きな意義がある。

2. 研究目的

大卒新任者の看護実践経験をもとにした学びと学びの発展を明らかにし、看護実践経験をもとに自ら学び続ける看護専門職育成のための、学士課程教育及び医療現場の人材育成のあり方を提言することを目的とする。

3. 用語の説明

本研究において、「看護実践経験をもとにした学び」とは、より良い実践を目指して「取り組んだこと」とその経験をもとに看護について「得たこと」から構成されるとした。「取り組んだこと」とは、実践により良く対処するために自分なりに考えて実施した行為、認知活動、思考活動であり、看護について「得たこと」とは、その経験から得た看護の知識や態度で、看護実践への考えや行動に継続して影響を与えるものとした。また、「新任期」とは、1～4年目ごろまでの経験の看護師をいうものとする。

第2章 文献検討

経験は、外界との相互作用の過程であること、実践により知識や技能を自分のものにすることや、自己を変化させるという点で、学びや成長にかかわる内容を含むものであると解釈され、経験から学ぶためには、新たなことへの開かれた態度や振り返りが重要であると考えられる。

新任期にある看護職者の看護実践経験をもとにした学びに関連する国内の先行研究は、経験による臨床実践能力向上（丸岡, 2008；中野, 2004；谷脇, 2006）や看護専門職としての自立・成長（荒川, 2006；宮脇, 2005；坂村, 2009）、仕事への参加の仕方により一人前の看護師になる過程を学習としたもの（山田, 2009）参加観察により新人看護師の行動（森, 2004）や行為の中のリフレクションのありようを示したもの（奥野, 2010）、大卒新人看護師の学習ニーズに関するものであった（山田, 2003）。大卒者を対象とした研究では、大卒新人看護師の体験・経験の意味や経験を通じた看護師としての成長、大卒新人看護師の体験をもとにした支援のあり方、学習ニーズと困難に関するもので、6件の内5件は1年以内の看護師を対象とした研究であった。

大卒看護師については、一定の経験を経て実力を発揮できるようになるとの評価がある（井部, 2002）ことや、新任期は、初心者から一人前看護師に成長していく変化の大きい時期でもあることから、1年目のみならず新任期としての学びを明らかにしていくことは重要である。また、新任者が、どのように自己学習の力を発揮して看護実践に取り組み学ぶのかを明らかにしたものはなく、課題であると捉えられた。

第3章 研究の構成

1. 研究の構成

本研究は、以下の3つの研究により構成する。

研究1は、大卒新任者の看護実践経験をもとにした個々の学びとその発展を明らかにする。研究2は、研究1の個別分析結果を統合し、大卒新任者の看護実践経験をもとにした学びとその意味を明確化する。研究3は、研究対象者の所属施設の新任者育成の取り組みの現状と課題を捉える。以上より、看護実践経験をもとに自ら学び続ける看護専門職の人材育成のあり方を考察する。

2. 研究方法

研究1は、学士課程卒業後、病院に勤務する卒後2～3年目看護師を対象とし、自分の成長や学びにつながったと思う看護実践経験について、2回の半構成的面接（2回目の面接は1回目の面接の8～10か月後）を行った。その内容を質的帰納的に分析し、研究対象者個々の看護実践経験をもとにした学びを記述する。また、経験の積み重ね方に着目し学びの発展を捉える。

研究2は、研究1で明らかになった個別分析結果を統合し、「看護実践経験をもとに取り組んだこと」、「看護について得たこと」について、意味内容の類似性により分類・整理し、大卒新任者の看護実践経験をもとにした学びの意味を明らかにする。

研究3は、研究1・2への協力を得た研究対象者が所属する3施設の看護部門教育担当者に対し、現在の新任者教育に関する現状や課題についての面接調査、および1施設の病棟教育担当者を対象としてグループインタビューを実施し、その内容を質的に分析する。

3. 倫理的配慮

本研究は、岐阜県立看護大学大学院研究倫理審査部会の承認（通知番号 23-A012-2）

を得て、研究対象者の所属する施設長、施設の看護管理者にも研究の主旨を文書または口頭で説明し、承諾を得て実施した。研究への参加は自由意思とし、研究対象者の同意を得るに当たっては、研究の主旨・目的を説明し、研究への参加により職務上の評価に影響することはないこと、同意後も参加をやめることができることを説明した。また、データの収集・分析において個人が特定されないよう匿名性を確保し、プライバシー保護に努めること、情報の管理及び破棄、研究の公表予定について口頭および文書で十分に説明し、書面での同意を得て実施した。

第4章 研究1 新任期にある学士課程卒業者の看護実践経験をもとにした個々の学びとその発展

1. 大卒新任者の学びにつながった看護実践経験

6名の大卒新任者が学びにつながった看護実践経験は、2回の面接を通して3～6つの経験が語られた。経験の多くは受け持ち患者へのケアに関するもので、患者と家族を含めたケアの経験、対象者の療養に対する思いや納得、対象者の自立や回復に焦点を当てたものであった。また、新人教育、その日のチームリーダー、学生実習指導などの新たな役割を担う経験も示していた。

初めての受け持ち患者ケアや新たな役割を遂行するに当たっては、見通しが持てない状況にあったが、自立を志向して実践に取り組んでいた。部署の環境は、全員が先輩に相談ができる環境にあったが、最初は、自分から相談ができたわけではなく先輩の声掛けにより、カンファレンスの活用や先輩への相談ができるようになっていた。また、ケアの成果を実感することで、その後の看護へのやる気ややりがい、看護への関心を強くした。他職種やチームの看護師と連携して取り組んだことは、自分自身の力量や看護のできることの限界を超えて実践を広げるものであった。

2. 大卒新任者の看護実践経験をもとにした個々の学びの発展

看護実践経験をもとにした個々の学びの発展について、対象 No.1 の事例を示す。対象 No.1 は急性期ケアにおいて、看護のできることは何かを考えながら行った看護実践経験について語った。2年目後半に、初めて人工呼吸器管理の必要な患者を受け持った経験では、先の見通しが持てない中、看護として自分なりにできることとして、ナースコールを自分で押せることを目標に取り組んだ。様々な方法で試行錯誤したが、うまくいかず看護のできることの限界を自覚した。一方、3年目前半に受け持った熱傷の患者への看護では、患者が受傷した手指で自分で食事ができるように他職種やチームの看護師に働きかけ、連携して問題解決に取り組んだ。結果、看護師が急性期にADL拡大に取り組む重要性を確信することができ、学びを発展させていた。

他の5名は、対象の思いに焦点を当て思いに寄り添う看護、学生時代からの自分の課題や看護への思い、仕事の拡大に伴い看護師としての責任を果たすことにおいて、看護実践経験を積み重ね、看護ケアへの取り組みを発展させていた。また、新たな仕事や役割を引き受ける経験は、チーム全体に視野を広げて自分が責任を持つなど、看護師としての自分の成長につながっていた。

第5章 研究2 新任期にある学士課程卒業者の看護実践経験をもとにした学びの意味

1. 看護実践経験において取り組んだこととその意味

大卒新任者は、初めて担当する仕事に対し、〔試行錯誤しながら、自信のなさや不確かさに対処し自立への道を探る〕では、看護師として自立することを模索した。また、看護専門職として

患者・家族の思いに添うよう努力する一方で、思いに添うことが難しい場合もあり〔対象者の思いに焦点を合わせたかかわりを模索する取り組み〕を心がけた。〔看護師としての責任や使命感を意識した取り組み〕では、看護師としての問題意識や使命感をもとに行動していた。また、看護チームの看護師や他職種、患者・家族など〔他者と協働して実践を前に進めていく取り組み〕に努めた。看護へのやりがい、看護師としての自分のあり方や目標を見出し、〔実践をもとに、次の看護に向けて自分を進めていく取り組み〕や、機会を捉えて自己学習し、新たな経験に挑戦するなど〔自分の成長や実践力を向上するための取り組み〕を行った。

2. 看護実践経験をもとに得たこととその意味

《命を守る看護師の責任の重さ》では、異変に気付く看護の責任の重さを実感した。《これまででは見えなかった対象者への深い理解》は、自分の想像や推測とは異なった対象者への理解の深まりを示した。《見通しや根拠を考え、確実に看護を実施する必要性や準備方法》は、先の見通しや根拠を明確にすることにより、正確に間違いなく看護実践を行うための心構えや準備の仕方を捉えた。《患者・家族の思いに直接かかわる看護の役割》は、患者・家族の思いに焦点を当ててケアを進める中で気づいた看護師の役割や、推測とは異なる患者の思いを知ることの重要性を捉えた。《受け持ち看護師としての患者の問題解決に対する責任》は、患者を受け持つ意味や責任について理解した内容を示した。《1人ではなくチームで実践に取り組むということ》は、チームの一員として、1人ではなく周囲の人と連携して実践に取り組むことを理解した。《看護に対する“できる”という手応え》は、看護でできることがある、また自分で看護ケアができることへの実感や自信を示した。《自分の成長のための目標や機会・方法》は、自分の目指す看護師の姿や成長につながる機会、新たな役割を担うことの意味を捉えた。

第6章 研究3 新任期の看護職者の看護実践経験をもとにした人材育成の検討

1. 看護部教育担当者が捉えた新任者育成の体制及び育成方法の現状と課題

研究対象者の所属する3施設では、教育担当者の育成や新人の技術面・精神面の支援体制の強化、教育体制の点検・整備などの取り組みを行っていた。また、育成計画の可視化や病棟全体で新人を育てる体制や風土づくりなど、全体で新人を支援する体制作りに取り組んでいた。一方、整備してきた教育体制が機能すること、教育活動の結果への適切な評価、OJTと集合教育の連携による運営、主体的に学べる環境整備などが課題であった。

新任者育成方法については、確実に技術を習得できるようにすることや、具体的でわかりやすいかかわり方の工夫、新人が自主的に研修に参加できるように考え進められてきた。一方、新任者育成方法の課題は、新任看護師自身が課題を持てる、根拠を考えることができる、個別性のある看護展開ができるようにかかわることであった。また、わかりやすい助言・指導を行い、うまくいかなかったことをしっかり振り返れるように対応することなどであった。

3施設の看護部教育担当者は、新任者に対して、2・3年目になると看護師としての成長や課題が見えてくると受け止めていたが、学ぶことに対する姿勢・学びの内容に個人差があると捉えていた。また大卒者に対しては、大学で養った思考力や理解力を大卒者の強みと捉えていた。

2. 病棟の教育担当者が捉えた新任者育成に関する現状と課題

B施設の病棟教育担当者が、新任者育成について捉えた現状として、慣れない環境で報告・相

談ができない新人に対し、本当の思いがつかめないと感じる一方で、慣れてくると、新人も普通の会話の中でいろんなことが言えるようになることや、受け持ち患者の思いを大事にして、深くかかわることができるようになっていくなどの現状が捉えられた。また、新任者の思いや考えが聴けるような場を設け、その人に合わせたかかわりをするのが課題であった。また、2～3年目看護師には、自力でケアをやってみることを期待していた。

第7章 総合考察 看護実践経験をもとに自ら学び続ける看護専門職者の人材育成

看護実践経験をもとに学び続ける看護専門職育成のために、学士課程では、自分と異なるその人やその人の力を尊重する利用者中心の看護の理念、看護専門職をめざして自己を育成することの責任と方法、他者と共に問題解決に取り組む意義と方法を学ぶことが重要である。そして、看護の使命、役割、責任の重さだけでなく、看護の素晴らしさ、おもしろさを理解し、大学での学修を通じて自ら看護専門職となることを選択し、自身の成長をマネジメントするための基盤となる知識・技術・態度について理解を深めていくことが必要であると考えられる。

看護実践経験をもとにした学びを促進するための医療現場の環境として重要なのは、安心して試行錯誤するための周囲の人々との信頼関係があること、受け持ち看護師として、患者の個々の患者・家族のニーズに責任をもってかかわる体制とその支援があることである。また、より良いケアを目指すために活用できる仕組みや資源の多様性とながらやすさ、大卒新任者の力量に応じた適切な仕事の役割の拡大であると考えられる。

第8章 結論

1. 大卒新任者は、看護でできることは何か、対象者の思いに焦点を当てた看護、看護に対する自分の考えや課題、仕事の拡大に伴う責任について看護実践経験を重ね学びを発展させていた。

2. 大卒新任者の看護実践経験において取り組んだことは〔試行錯誤しながら、自信のなさや不確かさに対処し自立への道を探る取り組み〕〔対象者の思いに焦点を合わせたかかわりを模索する取り組み〕〔看護師としての責任や使命感を意識する取り組み〕〔他者と協働して実践を前に進める取り組み〕〔実践をもとに、次の看護に向けて自分を進めていく取り組み〕〔自分の成長や実践力を向上する取り組み〕であった。また、看護について得たことは《命を守る看護師の責任の重さ》《これまでは見えなかった対象者への深い理解》《見通しや根拠を考え、確実に看護を実施するための必要性や準備方法》《患者・家族の思いに直接かかわる看護の役割》《受け持ち看護師としての患者の問題解決に対する責任》《1人ではなくチームで実践に取り組むということ》《看護に対する“できる”という手応え》《自分の成長のための目標や機会・方法》であった。

3. 各施設は、全体で新人を支援する体制作り、育成計画の可視化、教育担当者育成に取り組み、支援体制や教育担当者が機能すること、OJTとの連携、個別性や主体性を活かす育成方法が課題であった。また長期的視野で新任者の成長を捉え、2年目以降は能力向上への主体的取り組みを求めている。

4. 看護実践経験をもとに学び続ける看護専門職育成のために、学士課程では利用者中心の看護の理念、自己を育成する責任と方法、他者と共に取り組む意義と方法を学ぶこと、医療現場では、試行錯誤ができる周囲の人々との信頼関係、看護師として患者・家族の看護に責任をもつ体

制とその支援が重要である。

本研究の意義と限界

本研究の意義は、看護実践経験をもとにした学びから、自ら学び続ける看護専門職者の育成に具体的な示唆を得たことである。しかし、本研究は大卒新任者6名の看護実践経験の語りに基づく結果であり、大卒新任者全体の傾向を示すためには、さらに研究を重ねる必要がある。

文献

- 荒川千秋, 細川淳子, 小山内由希子, 他. (2006). 大卒新人看護師の支援のあり方に関する研究. 日本看護管理学会誌, 10(1), 37-43.
- 井部俊子. (2002). 【学卒看護師の課題】 看護系大学新卒者の臨床実践能力. 病院, 61(4), 288-295.
- 丸岡直子, 泉キヨ子. (2008). 新人看護師の転倒防止に対する認識とその認識を変化させる臨床経験. 日本看護管理学会誌, 11(2), 36-46.
- 宮脇美保子. (2005). 大卒看護師1年目の体験 新人看護師の1年目の立場から. 日本看護学教育学会誌 15(1), 15-24.
- 森真由美, 亀岡智美, 定廣和香子, 他. (2004). 新人看護師行動の概念化. 看護教育学研究, 13(1), 51-64.
- 永野光子, 舟島なをみ. (2002). 臨床看護婦・士の自己教育力と看護婦・士特性との関係. 順天堂医療短期大学紀要, 13巻, 1-10.
- 中野康子, 張替直美, 小林敏生. (2004). 新卒看護師の臨床実践能力向上に影響する要因と取り組みに関する縦断的研究. 山口県立大学看護学部紀要 8号, 99-108.
- 中山洋子, 戸田肇, 田村正枝, 他. (2010). 看護実践能力の発達過程と評価方法に関する研究 臨床経験1年目から5年目までの看護系大学卒業看護師の実践能力に関する横断的調査. 平成18年度~21年度 文部省科学研究報告書. 科学研究費補助金(基盤A) 成果報告書, 1-61, 2010.
- 奥野信行. (2010). 新卒看護師は看護実践プロセスにおいてどのように行為しつつ考えているのか 臨床現場におけるエスノグラフィーから. 園田学園女子大学論文集, 4号, 55-75.
- 坂村八恵, 岡本 裕子, 坪井 敬子, 他. (2009). 新卒看護師の専門職者としての自立体験 8名の学卒看護師へのインタビューを通して. 広島国際大学看護学ジャーナル, 6(1), 47-56.
- 谷脇文子. (2006). 卒後2~3年目看護師の臨床能力の発展に関する研究 卒後2年目と3年目看護師の臨床能力の向上・促進と経験の特質. 高知女子大学紀要, 55巻, 39-50.
- 土佐千栄子, 出口昌子, 上野貴子, 他. (2002). 経験3年目以上の看護婦・看護師の臨床実践能力の特徴(第1報) 3病院574名の看護婦・看護師を対象に. 日本看護管理学会誌, 5(2), 55-63.
- 山田香, 齋藤ひろみ. (2009). 新人看護師が臨床現場において一人前の看護師になるまでの学習過程 正統的周辺参加論(LPP)の視点から. 山形保健医療研究, 12巻, 75-87.
- 山田多香子. (2003). 【大卒看護師をどう活用し育成するか】 看護系大学を卒業した新人看護師の看護実践上の困難状況と学習ニーズ. 看護管理, 13(7), 533-539.